

高校における「朝の読書」 ― 18年間取り組んで ―

宮脇 隆志
(全国朝の読書連絡会)

【要旨】

『朝の読書が奇跡を生んだ』(高文研 1993 年)に触発され、1994 年に神奈川県立大沢高校(現・相模原総合高校)で初めて「朝の読書」に取り組んだ。本稿では、2012 年 3 月に厚木東高校を定年退職するまでの 18 年間の実践を整理し、その中から今後の課題を明らかにしていきたい。まず、「①みんなでやる、②毎日やる、③好きな本でよい、④ただ読むだけ」という「朝の読書」の原則とそのかかえる問題点について述べる。つぎに、高校において「朝の読書」に取り組む動機・効果を、読書習慣の形成、生活指導面、進路・学習指導面の 3 点に整理した。さらに、神奈川県の高校での実施率が全国一低い理由を、教職員の反対、時間設定の難しさなどから分析した。最後に、これからの課題をあげた。

1. 「朝の読書」の原則

提唱者・林公氏による「朝の読書」の原則は、「①みんなでやる ②毎日やる ③好きな本でよい ④ただ読むだけ」である。この原則は、ジム・トレリースが『読み聞かせ』のなかで提唱した「黙読の時間」の原則¹⁾がヒントになっている。

① 一定の時間だけ読ませること。

教師や親はそれぞれのクラスや家庭に「黙読の時間」を導入し、子供の熟達に応じて調整すること。教室の場合は、10 分ないし 15 分がのぞましい。

② 読むための素材は子供自身に選ばせること。

その期間内は、ほかの読み物と取り替えないこと。教材はすべて事前に選んでおくこと。

③ 教師や親も、読むことで手本を示すこと。

これは何よりも大切なことである。

④ 感想文や記録のたぐいはいっさい求めないこと。

以下、「朝の読書」の原則を、「黙読の時間」の原則とあわせて検討していきたい。

(1) 「一定の時間だけ」「毎日やる」

まず、「朝の読書」の特徴は、「一定の時間だけ読ませる」「毎日やる」「10 分ないし 15 分」という点にある。毎日継続して本に触れることによって、本を読むことが習慣になるというのである。この原則の根本にあるジム・トレリースの考え方は、次の言葉に象徴される。

『「黙読の時間」の原理は、きわめて単純である。読むことは技能である。そして、すべての技能と同じく、読む力(技能)は使えば使うだけ上達する。使わなければ、その分下手になる ― というわけである。』²⁾

『読書力』（岩波新書）の著者・斎藤孝氏も読書は「技」であり、読書はスポーツと同じだと強調している。

「読書は、放っておいても自然にするものだ、などということは大きな間違いだ。…中略… 本を読むことはスポーツと同じところがあって、自然にするものではない。ましてや、上達するためには、練習が必要だ。」³⁾

読書とスポーツを同様なものだというとらえ方はユニークであり、わかりやすい。スポーツ嫌いな子は、嫌いだからスポーツをしない。そうすると、ますます下手になり、ますます嫌いになる。読書嫌いの子も同じである。本を読み続ける習慣ができていないから、本の楽しさを知る前に本を投げ出してしまふ。また、本に触れようとしない。スポーツ嫌いや読書嫌いの子を「好き」に変える方法は、毎日スポーツや本に触れる機会をつくることである。したがって、「朝の読書」は読書の習慣を身につけるうえできわめて有効な方法である。

問題点は、教育現場ではこの「一定の時間」を確保することがなかなか難しいことである。わずか 10 分間の時間設定がきわめて困難なのである。また、「一定の時間だけ」読むことで、本当に読書の習慣が身につくのかという疑問もある。

(2) 「好きな本でよい」「子供自身に選ばせる」

「朝の読書」では、本の選択は本人にまかされている。嫌いなことを毎日やれば好きになるとは限らず、かえって嫌いになるという例も多い。そうならないための方法が「好きな本でよい」という原則である。

ただし、「好きな本がわからない」という生徒が多く存在する。「何を読んだらいいかわからない」生徒をどうするかが課題である。また、同じような本ばかり読んでいいのかという疑問に対しても答える必要がある。

(3) 「みんなでやる」「教師や親も、読むことで手本をしめす」

ジム・トレリスは、児童の段階を想定して「黙読の時間」を提唱したと思われるが、教師が生徒とともに本を読むことは高校生に対しても効果的である。

ただし、高校の場合、私語をやめない、本を開こうとしない、別なことをする、遅刻・欠席が多くて読書どころではないなどという高校もある。そういう高校では、教師が「読むことで手本をしめす」ことで、それらを改善できるほど甘くない。その場合、クラス全体、学校全体が静かに本を読む環境をどうつくるかが第一の課題となる。

また、「読むことで手本をしめす」を、10 分間の読書の時間に限定して考えてはならない。授業など教育活動全体のなかで、教師が「読むことで手本をしめす」ことが大事である。教科の授業などをおしてさまざまな本を紹介し、自らの読書体験を語ることが「手本をしめす」ことになる。

(4) 「ただ読むだけ」「感想文や記録のたぐいはいっさい求めない」

条件をつけない自由な読書が、生徒たちの読書の習慣づくりに効果がある。

ただし、感想文は求めなくても自己の読書記録をつくることはさしつかえないのではないかと思っている。これまで本を読まなかった生徒たちが、記録をつけることで充実感を得て、さらに読もうという気持ちになれば、それはそれでいいのではないかと思う。

「朝の読書」がいったん導入されると、教師たちは「ただ読ませるだけ」ということに陥りがちである。大切なことは、教師は生徒たちが読書に取り組む環境づくりに努力し、読書の時間だけでなく教育活動全体をとおして「読むことで手本をしめす」ことである。「ただ読ませるだけ」だと、進歩のない惰性的な活動に陥ってしまう危険性がある。

2 「朝の読書」の動機と効果

(1) 三つの動機

高校で「朝の読書」を導入する動機は、三つのことが考えられる。

一つは、生徒たちに読書の習慣をつけたい、本を読むことが好きになって欲しいという願いからのものである。小学校では、「読み」が学習活動の大きな柱であるために、この動機が第一となることが多い。高校では国語の教師や司書がこの動機から推進する例が多い。

二つには、遅刻をなくしたい、学校生活を落ち着いた始まりにしたいなど、生徒指導の立場からのものである。「朝の読書」に最初に飛びついた教師たちは、生活面・学習面でさまざまな課題を集中的にかかえた高校の教師たちであった。その理由は、『朝の読書が奇跡を生んだ』⁴⁾の中に、生徒たちが本を読むようになり、遅刻も激減したという「奇跡」の記録が載せられていたからである。「朝の読書」が遅刻を減らし、全くの静寂から学校生活をスタートさせ、「荒れた学校」を「落ち着いた学校」にするという魅力は、現在もなお大きい。

三つには、大学受験の学力の基礎となる国語の力をつけたいという進路・学習指導面からのものである。地方によっては比較的早い時期に、大学進学率のきわめて高い著名な高校から普及していったという例もある。

私の場合は、読書の習慣をつけたいということが基本である。ただし、最初に取り組んだ大沢高校では、生活指導面のことも強い動機であった。また、転勤した厚木東高校では、進路指導上の効果を強く説明した。とくに受験学力をつけるためだけでなく、大学等に進学した後の己学習力の育成も強調した。

これらの動機に対して、「朝の読書」が始まった当初から、生活指導面や進路指導面からの動機は不純であるという批判が強かった。それに対して私は、一つの教育活動にはさまざまな要素があり、それぞれの学校の実状からその動機に強弱があってもいいと答えた。生徒たちに読書の習慣をつけていくのにこれほど効果的なやり方はないし、付随した効果に生活指導や進路指導上のものがあったでもいいと考えているからである。

(2) 3つの効果

1) 読書の習慣の形成

「朝の読書」の効果は、まず読書習慣の形成である。このことは、どの実施校においてもアンケート調査によって証明されてきた。生徒自身が「朝の読書」によって「読書に慣れた」、「読書の習慣がついた」と実感している。

厚木東高校 アンケート調査 (2011 年 7 月調査 1 年生 280 人 2 年生 278 人)

A 「朝の読書」をとおして読書の習慣がつけましたか？

	1 年	2 年
ア もとからついている	87 人 (31 %)	106 人 (38 %)
イ ついてきた	137 人 (49 %)	125 人 (45 %)
ウ まだついていない	56 人 (20 %)	47 人 (17 %)

B 「朝の読書」以外の時間にも本を読んでいますか？

	1 年	2 年
ア 読んでいる	150 人 (54 %)	136 人 (49 %)
イ 読んでいない	128 人 (46 %)	142 人 (51 %)

「朝の読書」をとおして読書の習慣が身についてきたと答えた生徒は、1 年生の 49 %、2 年生の 45 %である。もし「朝の読書」がなければ、この生徒たちは読書の習慣がついていない可能性が高い。

「朝の読書」の時間以外に本を読んでいないと答えた生徒たちは、1 年生の 46 %、2 年生の 51 %である。もし「朝の読書」がなくなれば、この生徒たちは全く本を読まなくなるだろう。

読書の習慣が「もとからついている」と答えた生徒をのぞく生徒、つまり 1 年生の 69 %、2 年生の 62 %は、上記と同様に「朝の読書」がなければ、本を全く読まなくなる可能性が高い。

「朝の読書」を行っていない学校において生徒の読書実態を調査すれば、生徒の 1 割、2 割、3 割程度の生徒しか読書習慣がついていないことがわかるだろう。読書の習慣のある生徒が、40 人学級で 4 人 (1 割)・8 人 (2 割)・12 人 (3 割) 程度で果たしていいのだろうか。

これに対して、厚木東高校の場合、読書習慣が「もとからついている」「ついてきた」と答えた生徒をあわせて約 8 割であり、1 クラスあたり 30 名を越えることになる。知的成長が著しく、人生に対するものの見方を身につけていく高校生の時期に、どの高校でも 8 割ぐらいの生徒が読書の習慣があると答えるようになってほしいものである。

2) 生活指導面の効果

「朝の読書」の生徒指導面の効果は、非常にわかりやすい。大沢高校に赴任した 1993 年当時、1 日平均にして 200 ～ 300 人の生徒たちが遅刻していた。1 校時の授業を始めるときに、半数の生徒がいけないというクラスもあった。「朝の読書」が順調な軌道に乗った 2000 年には、1 日 1 クラス平均約 1 人の欠席、約 1 人の遅刻という状況にまで改善された。全校 (18 クラス) で 20 人程度の遅刻なのである。「朝の読書」の始まりのチャイムが鳴るときに、生徒の昇降口に駆け込んでくる生徒の姿はほとんどなくなった。

しかし、「朝の読書」を導入したら、自動的に遅刻が減少するというわけではない。大沢高校での遅刻の減少は、「朝の読書」を「総合的な学習の時間」の中に組み込み、単位を認定することで確実になった。出席回数が履修の条件になったからである。「朝の読書」の時間に規定の回数以上出席していなければ「総合学習」の単位は認定されないのである。

ただし、遅刻そのものをなくすという生活指導面での独自の指導がなければ、逆に遅刻の多い生徒の単位認定のために、「朝の読書」の補講が必要となり、その対処のためにかえって教職員が苦しむことになってしまう。

「朝の読書」によって、学校生活が 10 分間の静寂から始まる効果はきわめて大きい。生徒は、各自、本の世界に入り、私語が一切無い状態が生まれる。それぞれの生徒が本を読みながら、自己と向き合う。一種、禅に近い状態となる。静寂はその後の SHR、授業に良い影響を与える。朝の SHR でクラス担任が話し出すとき、「私語をやめなさい」、「先生の話聞きなさい」と注意する必要が全くなくなる。「朝の読書」は、人の話を静かに聞く能力も育てていくのである。

学びの場としての学校にとって、静寂のあとのスタートはなにものにもかえがたい。

「朝の読書」が、「荒れた学校」を「落ち着いた学校」に変えた例はきわめて多い。

3) 進路指導・学習活動上の効果

「朝の読書」によって進学実績があがった、学力が向上したということを数値的に示すことはなかなか難しい。

しかし、ふだんの授業の中ではその効果を実感できる。「朝の読書」をとおして、生徒たちが文章を読むことを苦になくなるのである。私の場合、日本史や現代社会などの授業で文章の資料を使うことが多かったのだが、それ以前の生徒に比較して生徒たちは読むことに抵抗をしめさなくなった。

また、教科書に出てくる文学作品や、授業に関連した本について話すとき、生徒たちの反応は格段によくなった。自分でもその本を読みたいという生徒、授業のあとで実際にその本を読んだという生徒も増えてきた。日常的に本に触れているので、本に対する感受性がよくなっているのである。「朝の読書」を始める前に教えていた生徒たちに比べると大きな変化である。

進路指導面からのアプローチは、生徒が本を読む動機づけとしても重要である。目先の受験のことしか考えない生徒の中には、「朝の読書は無駄」とか「不必要」という生徒もいる。しかし、読書力が国語力の向上につながり、すべての教科の基礎となることを理解すると、熱心に本を読むようになる。

3 神奈川県での取り組みの歴史

(1) 大沢高校での取り組み

神奈川県での最初の実施校である大沢高校は、1994 年 4 月から 1 学年のみで実施した。しかも、可能なクラスから実施するということにした。そして、1995 年度から全校での実施となったが、順調なすべりだしではなかった。このことについては、『続朝の読書が奇跡を生んだ』⁵⁾で報告したので参考にしてほしい。

まず、全校実施の提案に対して教職員から激しく反対意見が出された。「本校の生徒が毎朝静かに本を読むわけがない」、「読書は強制してやるものではない」、「うまく指導できる教師はいいが、うまくやれない場合はどうするのか」、「今でも大変なのに、新たな負担が増える」などの意見であった。結局、「本校の現状を変えていくには、何もやらないよりはまし」、「ダメでもともと。ダメだったらやめればいい」という声に押されての全校実施となった。

しかし、実際に「朝の読書」を始めてみると、職員会議で危惧されたとおりの惨憺たる状況となった。生徒が本を持ってこない、私語がひどい、本を読まずに寝ている、化粧をしている、教師が注意しても改めない、などである。

「朝の読書」が始まったばかりの時期だったため、NHK の衛星放送『週刊ブックレビュー』や、新聞・教育誌で大きく報道された。そのため、多くの参観者が来校した。訪問者があるとき、教師はあらかじめ生徒にちゃんと読書するようにと注意を促した。その結果、生徒のアンケートには、「朝の読書はやらせだ」「ウソだ」「やめろ」など不満や怨嗟の声が満ちることになった。この状態は、結局5年間つづいた。

神奈川県での最初に「朝の読書」に取り組んだ大沢高校がうまくいかなかったことが、同県の高校での取り組みを遅らせた一つの原因になったのではないかと考えている。

(2) 「総合的な学習の時間」への組み込み

大沢高校は5年間の模索のなかで、「朝の読書」を授業として位置づけ単位を認定する方法を探索していった。ちょうど1998年から、同校は「総合的な学習の時間」（以下「総合学習」と略す）に関する文部省の「研究開発学校」に指定されたので、「総合学習」のなかに「朝の読書」を組み込むことになった。

1999年4月より、「朝の読書」を「総合学習」の一環として実施した。すると、同校での「朝の読書」の状況は一変した。生徒たちは全員、本を準備し読書するようになった。私語・居眠り・立ち歩きなども一切消えた。欠席・遅刻も前述のとおりの激減した。

「朝の読書」に対する賛否はともかく、教職員の足並みがそろった。担任・副担任の2人が、「読書の時間」のチャイムが鳴る前に教室に行く。2人の教師がいるので、生徒たちも読書に専念した。多様な価値観をもつ教師たちを一つの教育実践でまとめていくことは、高校ではなかなか困難であるが、「朝の読書」が「総合学習」という授業の一部になったことで、反対の教師たちも手をぬけなくなった。

毎朝10分間の「朝の読書」は1週あたり50分になり、1単位相当の時間となる。2002年度に、時間割の中に位置づけられた「総合学習」を補完し、基礎的な力を育成する教育活動として、毎朝10分の「読書の時間」を「総合学習」の中の一構成要素として位置づけてもよいことが文部科学省によって公認された。

ただし、「朝の読書」を単位認定する授業の一部として認めるためには、次のような条件が必要である。まず「読書の時間」の教育目標・年間計画・評価方法をもつことである。各学年において「総合学習の時間」と「読書の時間」と合わせて2単位、3年間では6単位とする。「読書の時間」単独では、「総合学習」として認めることは

できない。「朝の読書」だけでは、「総合学習」が目ざす教育目標を実現できないからである。

「朝の読書」を「総合学習」の一構成部分として実施できるようになったことは、さまざまな困難をかかえている高校でも「朝の読書」をスムーズに実施することを可能にした。

(3) 高校の「朝の読書」実施率全国最下位の神奈川県

2002 年以後、神奈川県では「総合学習」方式での実施校が徐々に増加していった。菅・厚木東・霧が丘・瀬谷西・新羽などの県立高校である。光明学園相模原（現在は「総合学習」方式ではない）・向上高校などの私立高校にも広がっていった。もっと早い段階で「総合学習」方式が認められていたら、和泉高校（当時）も「朝の読書」をやめることはなかったであろう。神奈川の高校での普及がもっとすすんでいたかもしれない。

朝の読書推進協議会の調査（2012 年 11 月 2 日現在）、「朝の読書」の実施率は、小・中・高校の全国平均が 74 % である。小学校 78 %、中学校 79 % に対して、高校は 44 % と低い。高校での実施率は、高い県と低い都府県の差が大きい。実施率の高い県は宮崎県 88 %、長崎県 87 %、愛媛県 87 %、佐賀県 80 %、静岡県 80 %、高知県 78 % などである。九州・四国など西日本に多い。

実施率の低い都府県は、神奈川県 18 %、大阪府 18 %、埼玉県 19 %、千葉県 21 %、新潟県 23 %、京都府 24 %、東京都 26 % などである。ほとんどが都市部であり、首都圏の 4 都県が含まれている。神奈川県は大阪府とならんで全国一実施率が低い。とくに県立高校での実施は、1912 年度が 14 校であり、実施率約 1 割と極端に低い。

(4) 「朝の読書」の障害

神奈川県の高校での実施率が低い理由は、最初の実施校が困難をきわめたことや、「総合学習」組み込み方式がなかなか公認されなかったことなどである。しかし、最大の障害は、「教職員の壁」と「時間の壁」であった。

1) 「教職員の壁」

「教職員の壁」とは、教職員の「朝の読書」への反対である。普及にとっては一番きびしい障害であった。

大沢高校での反対意見は、上述のものに加えて次のようなものもあった。「読書の時間を設定し時間割を 10 分ずつ後にずらしていくと、昼食は 12 時 50 分になってしまう。これは人権上、問題である」、「なぜ読書なのか。縄飛びでもいいではないか」、「マンガはなぜいけないのか」などである。厚木東高校に転勤して提案した時の疑問の意見の中に、「神奈川でこれだけ普及していないということは、『朝の読書』に本質的な問題があるからではないか」というものもあった。近年、導入した高校の中には、「朝の読書を導入するのであれば、転勤させてください」と異動希望を出し転勤した教師もいたそうである。「朝の読書が入るのであれば、教師をやめます」とまで言った教師もいたということに驚かされた。

反対のための反対という意見も多いが、反対意見の中心的なものは、「読書は強制して行うものではない」というものである。その意見の背景には、教職員一人一

人の読書体験の違いがある。読書とは好きな時に好きな場所で好きなスタイルで自由に読むものだ、という考えが強い。その考えは、ある程度、理解できる。しかし、「朝の読書」は、個人の読書ではなく、すべての生徒に読書の習慣を身につけさせるために「読書の時間を保障する」ことにポイントがある。「朝の読書」は本の指定をせず、読む本は各自の選択にまかされている「自由読書」である。これまでの教育経験からいえば、生徒たちが読書の習慣を身につけるうえで「朝の読書」ほど効果的な方法はないと考えている。いまだに、なぜ反対なのか、納得できる反対意見を聞いたことがない。

高校の教育現場では、読書力は高校教育のなかで育成すべき重要な学力の一つだという認識が弱い。そのことが、反対意見の根底にあるのだろう。

2) 「時間の壁」

「時間の壁」とは「朝の読書」の時間を設定することの難しさである。従来の時間割の中に、10 分間の時間を設定するだけのことだが、これがなかなか難しい。

10 分間を生み出すには、二つの方法がある。一つは、始業時に「読書の時間」を設定し、そのあとの時間割を 10 分だけ後にずらす。大沢高校の例である。この場合、昼食の時間が遅くなりすぎるという批判が強い。また、放課も 10 分遅くなるので、部活動の時間が 10 分削られる。そのため、部活動に熱心な教職員からの反対も強くなる。

もう一つの方法は、始業の時間を 10 分早めて「読書の時間」を設定する。厚木東高校の例である。昼食も放課の時間も遅くならない。しかし、生徒の登校時間や職員の勤務時間を 10 分早めることになるので抵抗が大きい。

4 高校における「朝の読書」の課題

高校において「朝の読書」を普及し、実施率を高めていくためにはどうしたらいいか、以下に述べていきたい。

(1) 読書力育成の意義の確認

「大学で教える立場からすれば、高校卒業時には高度の読書力さえあればいいと言ってもいい。現実には、受験勉強のために読書をしない本末転倒が起きている…」⁶⁾と斎藤孝氏は『読書力』のなかで述べている。「高度の読書力さえあればいい」というのは誇張だとしても、生徒たちに自己学習力としての読書力を育成することは学校教育にとって必須のことだと思う。読書は、想像力・思考力・論理力・語彙力などさまざまな力を育てる。これからの世界と日本を考えると、読書力の育成について教育現場でもっともっと議論を深めていってほしいと思っている。

(2) 生徒の読書実態の調査

読書力育成の議論をすすめる上で重要なことは、生徒の実態を知ることである。

「あなたは、この 1 ヶ月間に何冊の本を読みましたか」、「あなたは、読書の習慣が身についていますか」などの質問をアンケートでとってみてほしい。1 冊以上読んだ生徒、読書習慣が身についている生徒の割合はどれほどであろうか。前述したように、40 人学級で、1 割なら 4 人、2 割なら 8 人、3 割なら 12 人、…である。この程度の

割合でいいのかということを真剣に議論してほしい。

(3) 「朝の読書」の意義・効果・方法の発信

「朝の読書」の意義・効果・具体的方法などを積極的に発信することが必要である。ホームページへの掲載、研修用冊子の作成、各学校現場への講師の派遣などが考えられる。この18年間で「朝の読書」を行うための具体的な方法は十分蓄積されてきた。それは、10分間の読書の時間をきちんと確保するための方法、「総合学習」として単位を認定するための基準・評価方法、「読書の時間」の欠席と遅刻の扱い、欠席・遅刻の多い生徒や単位認定の履修に満たない生徒の欠時の回復措置、静かな読書環境のつくり方、本の情報の発信方法、授業のなかでの読書指導などである。

(4) 授業のなかでの取り組み

「朝の読書」は、あくまでも読書の習慣を身につけるきっかけにすぎない。毎朝10分の読書だけで、読む本の量が増え、質が高まるというわけにはいかない。読書の質と量を高めていくためには、授業でたえず本の情報を提供していくことが重要である。

斎藤孝氏は、『読書力』のなかで次のように述べている。「私は中学校の教師になる人を育てる仕事をしている。学生には、もし教師になったら、授業の最初の三分ほどは必ず、自分が読んでいる本の話をするようにしろ、と言っている。常に現在進行形で、読んでいる本を紹介し続ける。これは教師自身にとっても刺激になるし、今読んでいるという臨場感があるので、相手にも伝わりやすい。」⁷⁾

国語や社会など教科を中心に、授業のなかで紹介する本のリストをつくり、教師自身も読みながら生徒に紹介することが重要だと思う。大和高校や厚木東高校では、国語総合の授業で、具体的に本のリストもあげて年間をとおしての読書指導を行っている。私も日本史の授業の中で、古典や文学作品などの紹介に力を入れている。

学校全体で「朝の読書」に取り組んでいない学校でも、国語の授業の最初の10分間を読書にあてている実践がみられる。それは、やがて学校全体で「朝の読書」に取り組む土台にもなる重要な実践だと思う。

(5) 学校図書館との連携

「朝の読書」を推進するにあたって学校図書館との連携は重要である。学校図書館は生徒にとって本の宝庫だからである。厚木東高校では、『ブックナビ』という図書委員会広報を毎月出し、新しく入った本や教師・生徒からの推薦本などの紹介を続けている。『ブックナビ』は、読書の時間に配布され、それに目を通してから通常読書に入ることになっている。

(6) 校長のイニシアチブ

「朝の読書」の普及にとって、校長の存在が大きい。私が提案した大沢・厚木東高校の両校とも導入にあたっては、校長の理解と支えが大きな力となった。また、導入にあたって研修会の講師として関わった菅高校や瀬谷西高校では、校長のイニシアチブが大きかった。長崎県の県立高校の実施率が100%近い状況にある背景には、県教委に在籍歴のあった元校長の存在が大きい。

(7) 朝の読書連絡会の活動

「朝の読書」を推進する団体の一つに全国朝の読書連絡会がある。その支部として

神奈川県朝の読書連絡会が存在する。「朝の読書」の推進には、このような連絡会の充実した活動が必要である。神奈川県でも会員がようやく増え始めた。会長・副会長を高校の校長・教頭に引き受けていただいた。

5 最後に

ジム・トレリスは、『読み聞かせ』のなかで次の言葉を紹介している。「ひとりで本を愛することを覚える子供などというものは、まずいない。誰かが、文字で書かれたすばらしい世界へ、彼らを誘い込んでやらなくてはならない。誰かがこの世界へ行く道を教えてやらなくてはならない。オリバー・プレスコット」⁸⁾

ミヒヤエルエンデの『はてしない物語 (=ネバー・エンディング・ストーリー)』(岩波書店)は、いじめられっ子の少年が、本の世界である「ファンタージェン」に入り込み、その中でさまざまな冒険をし、やがて人間の世界に戻ってくるすてきな物語である。物語の最後のところで古本屋の主人が、「ファンタージェンにいつてもどってくる」「そういう人たちが、両方の世界を健やかにするんだ」⁹⁾と語っている。

「朝の読書」に18年間にわたって取り組んできた私の結論は、「朝の読書」とは子どもたちをファンタージェン、つまり本の世界へと導く一つの手段・入口だということである。

1994年度の夏休み、「朝の読書」を導入したけれども困難に陥った大沢高校の状況をどう打開したらいいか、提唱者の林公氏のもとに相談にいったことがある。冷房が全く効かない職員室の片隅で、「そういえば、『朝の読書』というようなものがあつたと、語られるようなエピソードに終わらせてはならない」と熱く語り合ったことを、昨日のこのように覚えている。私の「朝の読書」への取り組みのすべては、『朝の読書が奇跡を生んだ』及び林公氏との出会いから始まったのであり、氏に大変感謝している。

昨年3月に定年退職してから、これまで18年間の「朝の読書」の経験を整理し始めた。その経験を少しでも多くの高校現場に伝えていくことができればと考えている。

【引用文献】

- 1) ジム・トレリス著『読み聞かせ』高文研 1987 p.261
- 2) 前掲『読み聞かせ』p.259
- 3) 斎藤孝『読書力』岩波新書 2002 p.6
- 4) 船橋学園読書研究会編著『朝の読書が奇跡を生んだ』高文研 1993
- 5) 林公+高文研編集部編『続 朝の読書が奇跡を生んだ』高文研 1996 p.206-221
「奇跡はまだ生まれてないが」
- 6) 前掲『読書力』p.31
- 7) 前掲『読書力』p.194-195
- 8) 前掲『読み聞かせ』p.105
- 9) ミヒヤエル・エンデ『はてしない物語』岩波書店 1982 p.586